

＜小中一貫教育の成果と課題（生駒北中学校）＞

※成 果

- 1、始業式・終業式・入学式・運動会・文化発表会等の学校行事の実施においては、小中教職員が合同・連携して取り組み、その業務内容や役割分担なども整理され、軌道に乗ってきたといえる。また、防災教育や安全教育、部団会、全校集会、小中合同の講演会等、小中 9 学年が一堂に会しての取組も年々充実してきている。さらに教育課程表や学校要覧、年間行事予定表、校時表等も全 9 学年で同一のものを作成し、共有している。しかしながら、現時点で校務分掌各業務に関しては、そのすべてを統合することは業務内容上機能的ではなく、基本的に小中別で行わざるを得ない。従って、例えば会議等において、小中合同の会議と小中別の会議を 2 回実施する必要が生じ、職員の負担増にもなっている。
- 2、「入学式」は、初めて小中合同で行った。小中それぞれに積み上げてきたノウハウを結集し、全く新しい形のを構築するために小中職員が一致団結して取り組み、実施した。地域や保護者の方々からはよい評価をいただいた。次年度以降の雛型となり得るものが作り上げられたと思う。
- 3、「始業式」や「終業式」「運動会」「文化発表会」については、前年度から取り組んでいる小中合同の形を総括の内容に沿ってさらに吟味検討して計画し、徐々に醸成の方向にあるといえる。
- 4、「学びタイム」として設定した昼休み 10 分間の帯取りの時間は、学力の向上を目指して数学と英語において基礎的・基本的な学習に取り組んできたが、2 年間の取り組み状況を総括し、次年度に向けては、読書活動の促進や国語科における視写活動等のよう、取り組みの幅を広げる工夫をしていくこととなった。
- 5、小中連携の大きな取り組みとして実施している中学校から小学校への乗り入れ授業は、国語科からは小学 3 年生から 6 年生の書写の指導、美術科からは小学 4 年生から 6 年生の図画・工作の教科指導、数学科・英語科・体育科・家庭科からは、小学 5・6 年に T・T 指導の形態で実施している。また小学校から中学校へは音楽科で乗り入れを行っている。それぞれの専門性を生かした授業や補助が各教科の指導内容の充実につながることを目指している。また中学校では、3 年生での少人数学級編成に加え、1・2 年生でも少人数教科指導に取り組み、きめ細かい指導によって学力の向上を目指している。
- 6、生徒指導における小中間の状況把握が常に行われる状況が生まれ、日々連携がスムーズに行われるようになり早期対応、予防措置につながっている。
- 7、地域や保護者の学校評価において、学校行事等の取組や体験的な活動の取組において年々高い評価をいただけるようになってきている。また、学校の掲げる教育方針についても徐々に理解され、賛同を得ることができるようになってきている。

※課 題

- 1、校務分掌については、2年連続で再編する必要性に迫られた。それぞれの長所を生かしながら小中体制のすべてをすり合わせる事が難しく、その部分で教職員の負担増につながっていることは否めない。
- 2、時間割において、乗り入れ授業や小中共通の校時表で活動させる関係上、時間割の変更に制約が加わる。特に3学期の中学三年生の進路事務の時期にアンバランスな授業時数を解消することが非常に難しい。
- 3、小中間における生徒指導の在り方に違いがあるため、きまりや校則指導等においてその連動が難しい。
- 4、小中一貫教育による学力の向上を目指しているが、家庭での指導や取組の充実が望まれる。
- 5、小学校高学年における乗り入れ授業の成果は、すぐに点数として現れるものではなく、小学校を順次卒業していく児童が3年間の中学校の課程を修了する時点での評価・検証が必要であると考ええる。